



写-192 草地と樹林の明るい状況



写-193 浸食斜面(ガレ場)の中にシカ道



写-194 ダルマ沢上流の状況(谷頭の植生荒廃)



写-195 ダルマ沢源頭部の植生被害地



写-196 池口岳近くに出現したミヤコザサ



写-197 ミヤコザサの食痕



写-198 池口岳山頂(北峰)



写-199 二重山稜越しの鶏冠山



写-200 加加森山の稜線を望む



写-201 岩場のタカネビランジ



写-202 池口岳の西面



写-203 保護林の西端の林況



写-204 西端に接する民有林



写-205 クマの糞(赤い実はオオヤマザクラ)

9 その他周辺地域（面平～易老岳、笠松山～兎岳、イヌブナ保護林）

南アルプス南部の主稜線に取付く主要な登山コースである易老渡から面平を経て易老岳に至るコース、易老池口林道終点付近から笠松山を経て兎岳に至るコース、大河原イヌブナ等林木遺伝資源保存林について調査した。



図-12 調査位置図9(易老渡から易老岳)

(1) 易老渡から面平を経て易老岳

登山口の易老渡から2時間ほどで国有林境の面平に到達する。面平は天然サワラやブナの大木が生育する区域で林床は貧相であるが、僅かに生育する低灌木にシカの食痕が見られる。

周囲のギャップではテツカエデやヨツバヒヨドリに食痕があるほか、シカの糞など生息痕が見られる。

面平から易老岳三角点(2254m)までは、尾根に沿った急な登山道を登るが、登山道沿いはコマツガ、トウヒ、シラビソからなる樹林帯である。時々倒木が原因のギャップが見られるが、

そこに発生している更新樹種には地上 30~100cm の高さに幹を剥皮した食痕が散見される。特にシカ道沿いでは、剥皮を繰り返され巻き枯らしになっているものが見られる。このほか、ツツジ類、カエデ類などでも食痕が見られる。

以上、この区間の被害状況は、食痕の多くが古い(2~4 年前)痕跡で新しい痕跡は少ないと判断されるが、これまでの被害状況を勘案し、場所によって B~C とした。



写-206 易老渡の登山口



写-207 面平の天然林(サワラ、ブナ)



写-208 サワラの大木



写- 209 ギャップの縁のテツカエデやヨツバヒトトリ



写-210 ヨツバヒトトリの食痕



写-211 シカの糞



写-212 コメツガやシラビソの樹林



写-213 ギャップ地の更新状況



写-214 シラビソが一斉に発生した状況



写-215 シカ道沿いの枯死木



写-216 被害の著しい場所



写-217 被害のない場所

(2) 笠松山から兎岳



図-13 調査位置図 10(笠松山から兎岳)

易老池口林道の登山口から 1 時間ほどで笠松山に到達する。笠松山は緩い尾根のシラビソ林で、林床にはシダ(シラネワラビ他)が優占する。この間クマの皮剥ぎ被害が多い。

兎岳にはこの緩い尾根伝いに登って行くが、途中、南斜面にはカラマツの植林地が続き、尾根より北側はシラビソ林である。カラマツ林の林床はヒメノガリヤス等のイネ科草本が優占し、尾根上はシダ類、北西斜面のシラビソ林の林床は貧相な状況にある。

保護林区域を含め、緩い尾根の続く間では、シカの被害は殆んど認められないが、シラビソの大径木における皮剥ぎ被害や糞などクマの生息痕が多く見られる。保護林区域に入り、標高 2300m 付近からシカによる剥皮被害や低木、草本層への食痕などが見られるようになる。但し、

剥皮被害については他の地域同様古いものが多い傾向にある。

以上からシカの被害ランクは、林道付近で C、笠松山から続く緩い尾根沿いは D、保護林に入り標高 2300m 付近から上部では C、兎岳直下の標高 2500m ピークあたりは B とした(写-222)。

なお、今回調査のために、2 日間易老池口林道を通ったが、両日とも林道上においてシカを目撃した。



写-218 易老池口林道の登山口



写-219 笠松山山頂方面



写-220 尾根より北西側のシラビソ林



写- 221 尾根の南側のカラマツ林



写-222 標高 2500m 付近の被害地
(イネ科草本、ホバトリカブト、ハ イツウ)



写-223 クマの皮剥ぎ(シラビソ)



写-224 クマによるシダの刈取りや踏付け



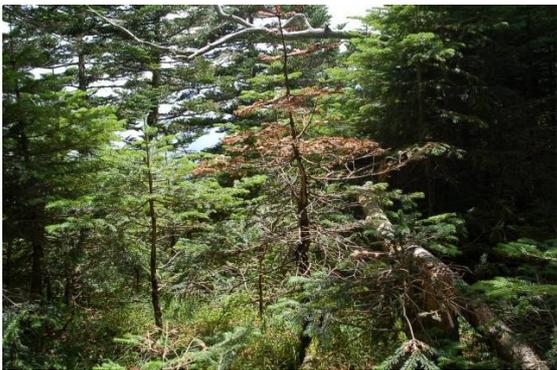
写-225 シカの糞(まれに確認)



写- 226 保護林内のシラビソ林



写-227 ギャップ更新の状況



写-228 シラビソ更新木の食害



写- 229 易老池口林道で目撃したシカ

(3) 大河原イヌブナ等林木遺伝資源保存林

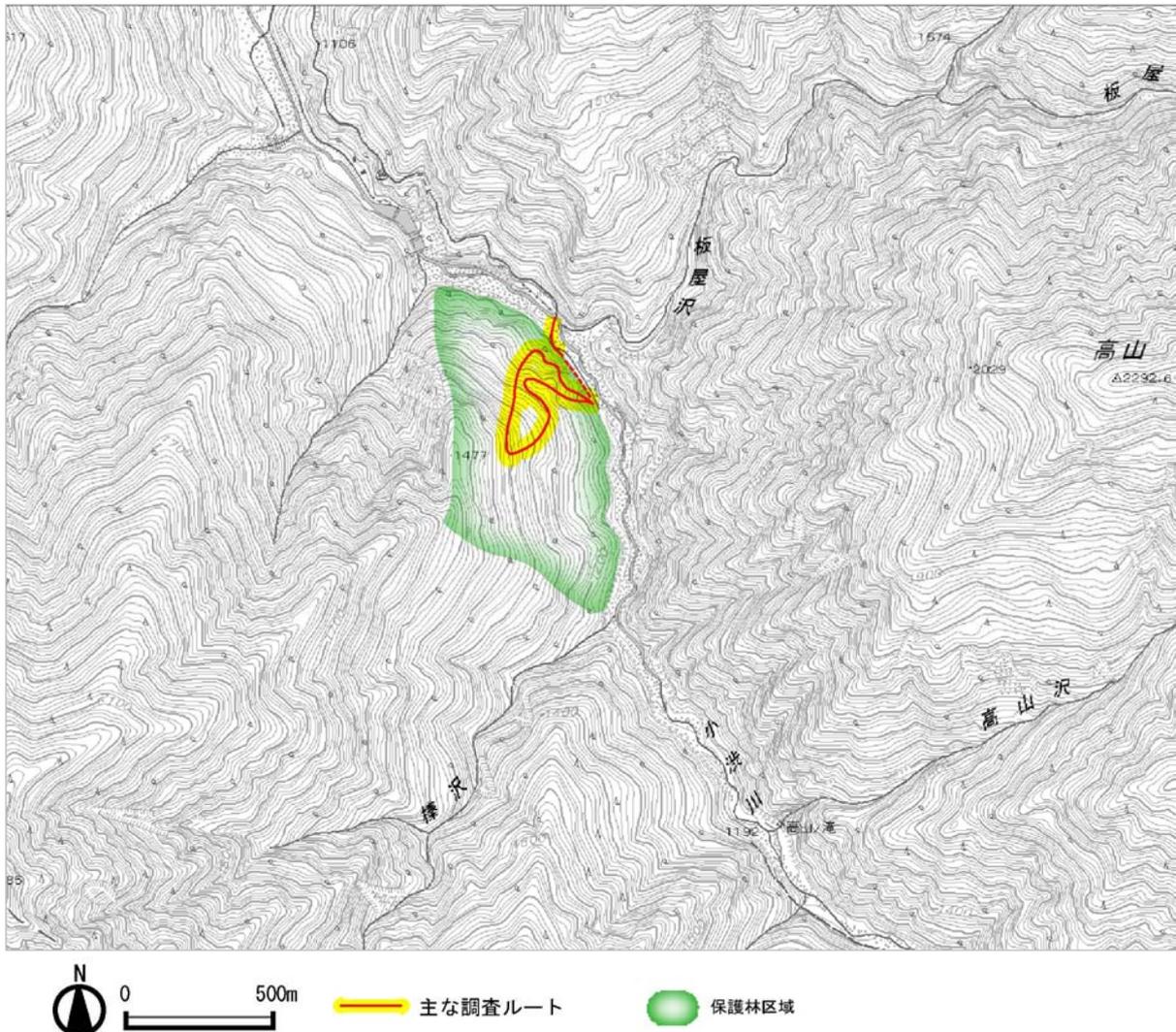


図-14 調査位置図 11

この保護林は、小渋温泉の上流約1kmで、小渋川左岸に位置する(写-230)。

相観は広葉樹の天然林で、上層を形成する主な構成種はイヌブナ、ブナのほか、ミズナラ、ミズメ、イタヤカエデ、サワグルミ等の広葉樹にコメツガ、ハリモミの針葉樹を混えている。低木以上の階層構造も良く発達しているが、下層(林床)植生は比較的貧相である。下層植生が発達しているのは、倒木や幹折れによるギャップのところに見られる。

シカの食痕は、林縁部で植生が繁茂しているところやギャップ箇所の下層植生が発達しているところで良く見られるが、林内では餌となる下層植生が少ないことからあまり見られない。シカ道、糞などの生息痕は、多くはないが全域的に見られる。また、今回の調査中にもシカ(オス)1頭を目撃しており、食害の程度から生息密度は低いと思われるが、生息圏域であることは間違いないところである。

また、動物被害としては、クマによる皮剥ぎの被害が見られた。新しいものは少ないが、古い痕跡があり、クマの生息域になっていると思われる。

以上、シカの生息は確認されたが、森林植生への影響は殆んど及んでないと判断し、保護林に対する被害ランクはCとした。



写-230 小渋川越しに望む保護林区域



写-231 イヌブナの実生



写-232 林内状況（イヌブナ、ブナ）



写-233 イヌブナの側芽の食痕



写-234 林内状況(イヌブナ、ブナ、ミズメ等)



写-235 林内状況(サワグルミ、イタヤカエデ)



写-236 林内攪乱（倒木）



写- 237 クマの皮剥ぎ跡



写-238 ハリモミ



写- 239 シカの糞



写-240 コウシンヤマハッカの食痕

V シカ被害の状況

調査区間別の被害概況を前章に示したが、昨年度の調査結果も踏まえ南アルプス地域におけるシカの被害状況を概括すると以下のとおりである。

1 被害分布図の作成

シカの被害程度を表す適当な基準がないことから、昨年度、次のようなランク区分とその定義付けを行った。

表-4 シカ食害の被害度区分

被害の有無	ランク	区分の考え方	補記
シカの植生への被害がある	A	シカの食害が植生に重大な被害を与えている。	・植物の絶滅 ・群落の消失
	B	森林植生、植物群落への大きな影響は及んでないが、食害等の被害がある。	・容易に生息痕跡が見られる。
	C	食害等が認められるが、森林植生への影響は心配ない程度。	・生息痕跡はある。
シカの植生への被害がない	D	被害がない。あっても殆んど気にならない。	・シカの形跡がない。又は少しある。

したがって、今年もこの基準を基に調査し、踏査ルート上で確認した植物への食痕(採餌痕)、足跡、糞、ぬた場等の状況から被害程度を A～D にランク区分し、被害状況を表示する被害分布図を作成した。被害分布図には、A～D のランクを色に置換えたマークを踏査ルート上に描画した。ルート及び位置は、簡易 GPS の計測したデータを基に描画した。

なお、被害地は植生分布と関連している可能性が高いように考えられることから、被害分布と被害箇所の植生条件が同時に見ることができるように、基図には環境省の植生図(1/5 万)を利用することとした。

今年の被害度ランク付けは、現状の食害の程度を判断基準として判定している。このため、数年前に著しい食害を受け、その後も繰り返し食害され、食害前の植生状態が単純な草原状(牧草地のような状態)の植生状態に変化してしまっているケースを被害ランク A とし、最近の食痕は少ないが、低木等木本類への食害痕跡や生息痕跡が容易に確認される場合は B と判定した。この結果、被害ランクの高い箇所として、三峠から烏帽子岳、大日影山、板屋岳周辺、百間平から百間洞山の間、聖平を中心とした小聖岳から南岳の間、上河内岳と茶臼岳の間の二重山稜の草原、易老岳に至る間の稜線に見られる緩い尾根、三吉平、静高平、センジガ原周辺、加加森山周辺においてシカ被害が認められた。そして、これらの被害地の多くは、比較的傾斜が緩い地域、ダケカンバ林あるいはダケカンバ林に接する地域、高茎草原や雪田草原などで共通している(図-15)。

ちなみに、昨年度調査した北部地域では、被害ランクが高い箇所は沢筋、ダケカンバ林周辺に多く分布し、シラビソ-オオシラビソ林からなる樹林帯では植生被害は低い傾向であった。地域別には、北沢峠付近、藪沢、馬の背ヒュッテから馬ノ背の尾根、松峰のカラマツ林一帯、仙丈ヶ岳から大仙丈ヶ岳、井川越、北荒川周辺、塩見岳の東南斜面、三伏峠周辺、鳥倉林道終点付近において植生へのシカ被害が見られた(巻末資料:シカ被害分布図参照)。

2 シカの出現分布

昨年度の調査は、最高峰の仙丈ヶ岳(3,033m)を始め駒津峰、小仙丈岳、伊那荒川岳、北荒川岳、本谷山の各山頂付近及び登山道沿いの殆ど地域でシカによる植生被害及び生息痕が確認され、今年度調査した南部地域でも小河内岳、荒川前岳、中岳、小赤石岳から赤石岳、聖岳、上河内岳の各山頂周辺を除く殆ど地域で食害痕、生息痕が確認された。標高では、亜高山帯上部から高山帯にあたる 2200～2600m 付近で痕跡が多く、2700～2800m 以上になると足跡などの生息痕は少なくなる。

シカは、林道や登山道を移動経路として利用しているようである。調査時にシカの被害地を遠望して植生被害の著しい場所を地形と対比して見た結果、草本植生や低灌木の多い沢筋からダケカンバ林に入り、さらに稜線へと移動している様子が窺えた。

昨年調査では、南アルプス林道より上部の歌宿沢を例に「沢沿いに草原が開け、そこには明瞭なシカ道が確認された。沢の中ほどからシラビソ林、ダケカンバ林に移行しており、沢頭付近では馬ノ背の尾根のダケカンバ林と繋がっている。この東側の平右衛門谷の谷頭付近では、ダケカンバ林の林床が著しい被害を受けていた。」としている。また、藪沢沿いでは、登山道もあるが沢の両側に広がる雪崩草原が一面食害に遭っており、この斜面はダケカンバ林域へと続いている状況で、ダケカンバ林の林内に入ると林床植生が食害を受けていた。シカの群れが確認された小仙丈沢カール、大仙丈沢カールでも、流下する沢筋では藪沢と同様両岸が草原となり良好な移動経路であるように見られた。

これらの現状から、南アルプスの高山帯、亜高山帯に出没するシカの多くは、林道や沢地形を利用してダケカンバ林に入り、そこから稜線や登山道に辿り着いているものと推察される。

また、被害地を局所的に見ると、斜面傾斜が緩い場所で多くのぬた場、ねぐら跡、著しい採餌跡、糞だまりを確認していることから、シカにとっては緩傾斜地が生活上重要な場であることが伺える。

以上、南アルプスでは、ほぼ全域がシカの分布(出現)域であると考えられる。また、ダケカンバ林、沢地形、緩傾斜地が連続しているような地域において、シカの出現する可能性が高いと推測され、現実には、このような条件の場所ではシカによる著しい被害が例外なく発生していた。

3 植生被害の現状

南アルプスの亜高山帯から高山帯にかけて分布する主な植生は、亜高山帯(概ね 1500～2500 m)ではシラビソ群落、ダケカンバ群落が、亜高山帯と高山帯(2500m 以上)の境付近に高茎草原が、高山帯には雪田草原、風衝草原、高山低木群落が分布している。

このうち、シカによる植生被害が発生していたり、今後被害が懸念される群落は、ダケカンバ群落、高茎草原と雪田草原、風衝草原であると考えられる。そこで、この地域に分布する植生タイプごとの概況及び被害状況について述べると次のとおりである。

① シラビソ群落

シラビソ林域では、シカ道、シカの糞、更新樹種の剥皮、その他低木類への食痕などシカの痕跡が確認された。中には、シラビソの幼樹(直径 5cm 以下)の幹に剥皮された古い食痕が集中している地区もあったが、シラビソの更新には問題ない程度と考えられる。

以上、シラビソ林に関しては、シカの生息痕は認められるものの、森林への被害程度は比較的軽微であると考えられる。